

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第 卷三十第

行發日一月九年十正大

論叢

給付能力原則の適用

法學博士 神戸 正雄

農業勞働問題

法學博士 河田 嗣郎

中世都市の發達

文學博士 三浦 周行

時論

我國の地方税を論ず

法學博士 小川郷太郎

說苑

八時間勞働制の沿革

法學博士 山本美越乃

小學教育費の研究

經濟學士 小山田小七

井リヤム・タムスンの分配論

經濟學士 堀 經夫

雜錄

住居統計概説

法學博士 財部 靜治

伯林に於ける乳兒死亡率

法學士 汐見 三郎

戰後英吉利の經濟狀態

法學士 小島昌太郎

日英米の海軍協定

法學士 小島昌太郎

伯林に於ける乳兒死亡率

汐見三郎

幼年者死亡率特に乳兒死亡率の研究は、人口統計に於て看過し難き重要な題目である。最近著の外國雜誌を見るに、伯林に於ける乳兒死亡率に關する Joseph Ehler の興味深き報告が載つてゐる。

教授 Silbergleit は、伯林に於ける乳兒死亡率の趨勢に關し、千八百七十年より千九百十九年の長き期間にわたり、貴重なる研究を發表した。生産せし者の數 (Zahl der Lebendgeborenen) と生産せし者の中滿一歳以下で死亡せし者の數 (Zahl der Gestorbenen ohne Totgeborene von 0-1 Jahr) と、滿一歳以下で死亡せし者が生産せし者全體に對して占むる割合、即ち乳兒死亡率 (Säuglingssterblichkeit) とを一表に纏めて見ると、此長期間中に伯林に於ける乳兒死亡率が漸次減少しつつある事が明となるのである。乳兒死亡率の最高に上りしは、普佛戰爭の行

* Die Säuglingssterblichkeit in Berlin (Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik. 25. Mai 1921)

はれし千八百七十一年であつて四〇・一%を示し、最低は千九百十六年の一二・八%にして最高率の約三分の一にも達しないのである。乳兒死亡率を十年平均により算定すると、次の結果を得る事が出来る。

年 代	乳兒死亡率
一八七〇年代	三三・二%
一八八〇年代	二七・七
一八九〇年代	二三・二
一九〇〇年代	一九・一
一九一〇年代(一九一〇年方)	一四・八

本表を基礎として、伯林の乳兒死亡率の趨勢を研究する。先づ乳兒死亡率と出生率との關係を明にし、次に乳兒死亡率の毎年比較、更に毎月毎季比較を試み、最後に乳兒死亡の原因に及びたい。

乳兒死亡率の數字に影響する事最も多きは、出生率の數字である。出生數大なる時は乳兒死亡増加し、出生數小なる時には乳兒死亡率の僅少なるを常とする。伯林に於て戦争中死亡率の

激減せしも、これ全く出生率減少の結果に外ならない。以下年代を追ひ両者の比較を試みる。千八百七十年代に於ては、生産率が四一・四%の高率を示し、従つて乳兒死亡率も三二・一%の多き上つたのである。

千八百八十年代に入り、生産数の平均が前年代より一三・五%減少して三五・八%となり、他方乳兒死亡率は一三・六%減の二七・七%の數字を示した。

九十年代には、出生數は二九・六%となり一七・二%減である、乳兒死亡率は一六・三%減じて二三・二%となつた。

廿世紀の最初の十年間に於ては、出生數は二五・〇%であつて前期より一五・六%低下した乳兒死亡率の方は一七・八%減の一九・一%である。

千九百十年乃至千九百十八年の九年間にては出生數一六・九%乳兒死亡者數一四・八%の結果を示してゐる、従つて出生數は前期間の約三分の一減即ち三二・三%減じ、乳兒死亡率の二

二・四%減と對してゐる、結局此期間に於ては、乳兒死亡率の減少は出生率の減少よりも三〇・六%ばかり低い譯である。

出生數と死亡率との比較を明瞭ならしむる爲めに、次の統計を作つた。

年代	乳兒死亡率	出生率	前年度比較減少割合	乳兒死亡率	出生率
一八七〇年代	三・二%	四・四%	三・六%	三・五%	
一八八〇年代	二・七%	三・八%	一・三%	一・七%	
一八九〇年代	二・二%	三・六%	二・八%	一・六%	
一九〇〇年代	一九一	二・五%	三・四	三・三	
一九一〇年代	一四・八	一・九			

本表を見ると、何れの年代に於ても出生率と乳兒死亡率とは大體同方向を辿つてゐるのに、獨り千九百十年代に於ては兩者の間に大なる開きが生じてゐる。此奇異なる現象を如何に説明すべきか、千九百十年代を、千九百十年乃至千九百十三年の平和の時期と、千九百十四年乃至千九百十八年の戦争の年とに分し、更に詳細に研究を進める。

千九百十年代を二期に分ち、乳兒死亡率と出

生率とを一表に收め次の數字を得た。

年代	乳兒死亡率	出生率	前年度比較減少割合	乳兒死亡率	出生率
一八九〇年代	三・三%	元・九%	二・八%	一・五・六%	
一九〇〇年代	一九一	二・五%	一〇・三	一・七・八	
一九一〇年代	一九一	一〇・八	四・九	三・一	
一九一〇年代	一九一	一〇・八	四・九	三・一	

戦前四年間を平均すると出生率二〇・六%乳兒死亡率一五・二%、前期間比較減少割合はそれぞれ一七・六%・二〇・二%であつて大體同様の數字を示してゐる。然るに千九百十四年乃至千九百十八年の戦時中を調べると全く趣を異にしてゐるのである。出生數一四・〇%に對し乳兒死亡率は一四・五%、従つて出生數が三二・一%の大減少を遂げてゐるのに乳兒死亡率は僅々四・九%減少せるに過ぎない有様である。これ出生率と乳兒死亡率との平行せる從來の經驗を根本的に打ち破れるものであつて、戦禍の及ぶ所を容易に察する事が出来る。

最近の數字特に千九百十三年乃至千九百十九

年の乳兒死亡率に就き毎年と比較を試みる。

此期間を通じ、滿一年以上生殘者の數が出生數(死産を含む)全體に占むる百分率の最小なるは、千九百十四年の八一三・七と千九百十九年の八一四・三とである。従つて此兩年を以て乳兒死亡率の最大なる年とする、千九百十四年に死亡率の大なりしは、夏季の温度の異常に高かりしに歸する事が出来る。然し千九百十九年にかく不良の結果を生ぜしは、全く乳兒を養ふべき母親の身體が營養不良に陥りたのに原因してゐるのである。尙石炭の窮乏の結果、乳兒の養育に必要な室内の保温が思はしくなかつた事も、其原因に數へねばならぬ、これ亦乳兒の犠牲の數を一層多からしめた所以である。

成績の稍良好な年は千九百十七年と千九百十八年にして、八二〇・一%と八二〇・七%と云ふ生殘者の割合である。千九百十三年に於て八三〇・五%、千九百十五年では八三四・五%と云ふ好成绩を示してゐる。

全七年を通じて一等良好なのは千九百十六年

の八四六%の生殘者であつて、これ全く夏季の温度の低かりしによるのである。千九百十九年の生殘者八一四%、千九百十三年の生殘者八一%より考へると、平和第一年の乳兒死亡率は戦前の死亡率よりも大なりと斷する事が出来る。

以上は死産を含める死亡統計表に關し毎年の實績を示したのであるが、更に生産のみの數に就て調べると、結果は次の如くである。

年次	第一年生殘者數	第一年生產者一、〇〇〇に付き		乳兒死亡率の順位
		死亡者數(乳兒死亡率)	年標準乳兒死亡率	
戦前(一九一三年)	八四三	三三・七	一〇〇・〇	第五
一九一四年	八七五	二五・五	一一三・四	第二
一九一五年	八六二	二七・七	一一一	第六
戦後(一九一六年)	八八〇	一九・〇	一一七	第七
一九一七年	八三三	二四・八	一一八	第三
一九一八年	八三六	二四・四	一一八	第四
戦後(一九一九年)	八四五	二五・五	一一一	第一

乳兒死亡率の毎年比較より、更に進んで月別

季節別の比較にうつりたい。

上記七ヶ年の事實によると、生後第一月が乳兒にとりては最も危険率が多い様である。第二月目は死亡率は俄に三分の一に減じ、其後徐々に減少を續ける。千九百十三年乃至千九百十九年の平均によると、第一月に五二・四％、第二月に一七・三％、第三月に一五・四％、第四月に一二・三％、死亡し、かくて遂に第十二月には僅かに四・八％なる死亡率を示すのである。

更に毎曆年の乳兒死亡率を四半季に整理すると、千九百十三年の始めより千九百二十年の中間迄の材料を得る事が出来る。其結果、かの死亡率が盛夏の頃に頂點に達すと云ふ事實は、七ヶ年中、千九百十三年、千九百十五年、千九百十六年、千九百十八年及び千九百十九年の五箇年には毫も窺ふ事が出来ない。只千九百十四年及び千九百十七年の二年にのみ、季節的影響が現はるるに過ぎない。千九百十八年以後は、盛夏に於ける死亡率の増加よりも寧ろ嚴冬の乳兒死亡の現象が顯著である、千九百十九年然り、

千九百二十年亦然りである。

千九百十三年の初季より千九百二十年の中間に至る三十季節を比較研究して見ると、乳兒死亡率の最小なるは千九百十六年の夏の季節、最大なるは千九百二十年の第一季である。千九百廿年の第一季節は實に二〇・五％の死亡率を示し、かの千九百十四年の盛夏の絶頂の數字一九四％を遙に突破してゐるのである。而も此季節には先天的弱質による死亡者が生産數の五六・二％に達し、他の二十九季節に當て見ざる現象を呈してゐる。これ全く纖弱なる乳兒に最も必要なる住居の保温に缺くる所があつたからである。「石炭飢饉は遂に幾多の幼兒を犠牲に供せり」と報告せられてゐるが、蓋し適評であらう。

五

最後に乳兒死亡の原因を調べて見ると、先天的弱質と胃腸病とを代表的のものに數へる事が出来る。

最近七箇年の經驗によると、乳兒死亡の原因の過半は先天的弱質と胃腸病との兩者である。

生後三箇月間の死因を見ると、先天的弱質と黴毒とが最大多數を占めてゐる。乳兒の成長に伴ひ消化不良に對しては抵抗力が増してゆくが、肺炎に侵さるゝ危険は依然存してゐる。

乳兒の成育するに従ひ、其生命を脅す傳染病は主として麻疹及びデフテリアである。かの遺傳性黴毒は生後三箇月間が最も恐ろしい様であるこれ千九百十四年以來否定し難き事實となつてゐる。然し遺傳性黴毒其他一般傳染病の災害は乳兒死亡の全體に比すれば實に微々たるものである。

學者或は乳兒死亡率を目して、當代社會の文化測定の尺度なりと云つてゐる。其言の當否は暫く措き、乳兒死亡率が人口統計論に占むる地位の重大なるは、誰しも異存無き所であらう。乳兒死亡率なる此重要なる事實を捕へ、戰禍の中心たる伯林を背景として世界戰爭の前後にわたり、比較調査したのが本研究である、特に乳兒死亡率を出生率と相關連せしめた點に、本研

究の獨特の長所を發見する事が出来る。

(一〇、八、一〇)